

大学生の恋愛観・結婚観

今井靖親・森田健宏
(心理学教室)

University students' belief
on romantic love and marriage

Yasuchika IMAI and Takehiro MORITA
(Department of Psychology)

Synopsis: The purpose of this study was to investigate the belief of University students on current romantic love and marriage. Subjects were 200 (91 male and 109 female) undergraduates with a mean age of 19:4. An original questionnaire was used for this study. The main results appeared as follows : (1) There was no significant difference on ideal between male and female about romantic love and marriage. (2) Both male and female of University students have similar belief on the current style of romantic love and marriage.

Key words: romantic love, marriage

恋愛や結婚は青年期より多くの者が経験し、強い関心をもたれていることがらである。心理学の分野においても、近年は、生涯発達心理学の観点から、恋愛及び結婚が青年期における重要な発達課題であると指摘されている(杉村,1988)。

恋愛及び結婚についての研究は、従来より様々な領域でなされているが、それらの多くは事例紹介や著者の経験論的知見に基づくものとなっている。このことについて、松井(1993)は、経験論的に書かれたものは、著者と読者が同じ体験を共有できる保証が無いこと、人間関係は所属する集団によって異なるなどの理由から、より客観的、科学的な知見に基づく研究の必要性を主張している。

恋愛や結婚に関する最近の心理学的研究の代表的なものとして、松井(1993)を挙げることができる。彼は、Lee(1973)による恋愛意識の類型理論に基づき、恋愛行動の進段階による恋愛意識の違いを、現代の青年を対象に調査している。その結果、恋愛関係の進展に伴い、ロマンティックな気分(Eros)から、献身的(Agape)、激情的(Mania)な気分が高まってくること、現代青年の恋愛意識は、ErosやManiaが中心的存在であることなどが見いだされた。また、和田(1994)は、恋愛至上主義、結婚への恋愛、恋愛のパワーという3つの次元から恋愛に対する態度についての検討を行っている。その結果、複数の対象との恋愛経験の有る者のほうが、無い者よりも理想観や恋愛に対するパワーが低いことが明らかにされている。結婚については、川畑(1990)が、中学校・高校・専門学校の女子を対象に結婚に対する理想像を調査し、過去の研究結果との比較を行っている。その結果、かつてはあまり見られなかった欧米人に多い快楽主義的結婚観をもつ者が多くなってきたことを見出している。

ただし、これらの研究は欧米のデータに基づいて行われた追試的研究であって、必ずしも日本の現代の若者の意識やライフスタイルに基づいたものではなかった。そこで我々は、この種の調査は、もっと現代における風潮や様相に即したものであるべきだと考えた。

ところで恋愛や結婚の考え方は、近年大きな変容を遂げてきている。恋愛に関しては、古川ら(1994)が都内高校生の意識調査を行い、最近の高校生は恋愛の進展は考えずに、その場の感情での付き合いが多いということを見出している。また、結婚に関しては、総務庁統計局(1995)によると、1991年に厚生省が行った人口動態社会経済面報告について、「シングルス」と呼ばれる結婚を望まない人々が、特に20～30歳代の若い女性に多いことが指摘されている。一方、経済企画庁(1992)の国民生活白書においても、出生率の低下の要因の一つとして未婚化・晩婚化が指摘されている。これらの現象について近藤(1993)は、かつて見られた「男は外で仕事、女は家で家事・育児」という性別役割分担から、「男も女も仕事・育児・家事」を望む夫婦像へのシフトが始まっている、と分析している。さらに、その背景として、雇用問題などによる男女平等意識の高まりや単身者文化の確立化など社会文化的要因の影響が考えられている。これらの報告を裏付けるように、若者向けの雑誌や書籍には、「本命」・「キープ」などという言葉に象徴されるように、恋愛対象を複数以上もつこと、「合コン」・「ナンパ」という一時的な恋愛関係を楽しむことなどが紹介されている。また、結婚についても、「成田離婚」や「家庭内離婚」という言葉に代表されるように、夫婦関係の不和や維持困難が社会問題化し、「マリッジ・カウンセリング」と呼ばれる夫婦カウンセリングへの来談者が増加している。

そこで本研究では、以上の見解に基づき、現代のライフスタイルに即した「若者の恋愛観・結婚観」の一端を探るため、大学生を対象とした意識調査を行うことを目的とする。

方法

調査対象：本学学部生200名（男子学生91名・女子学生109名）

材 料：恋愛及び結婚の意識調査についての調査用紙

手続き：調査は集団で実施した。まず、調査者が本調査の目的及び記入方法の教示を行った後、自由速度法により回答してもらった。その後、調査者による回収を行った。所要時間はおよそ20分～30分であった。

調査内容ごとの回答方法：

（質問Ⅰ）「あなたが恋愛対象とする人の理想像を5つあげてください」

（質問Ⅱ）「あなたが結婚対象とする人の理想像を5つあげてください」

☆上記の質問については、自由記述法により回答を求めた。

（質問Ⅲ）現代に見られる恋愛のスタイルに関する質問（12項目） ※項目については結果と

（質問Ⅳ）現代に見られる結婚のスタイルに関する質問（12項目） 考察参照

☆上記の質問については、以下に示す判断基準に基づき6段階評定で回答してもらった。

《判断基準》

1	2	3	4	5	6

←当てはまっていない 当てはまっている→

- 1 (自分の考え方に) 全く当てはまっていないと思う。
- 2 (自分の考え方に) あまり当てはまっていないと思う。
- 3 (自分の考え方に) どちらかといえば当てはまっていないと思う。
- 4 (自分の考え方に) どちらかといえば当てはまっていると思う。
- 5 (自分の考え方に) かなり当てはまっていると思う。
- 6 (自分の考え方に) 全く当てはまっていると思う。

なお、質問Ⅲ、質問Ⅳの質問項目の作成にあたっては、関連のある雑誌や文献を参考にして項目内容を選出し、それらについて調査意図の妥当性を教育心理学専修の大学院生に評定してもらった。その結果、評定値の高いものを本調査の質問項目とした。

結果及び考察

《恋愛対象および結婚対象の理想像について》

この調査では、恋愛対象および結婚対象の理想像について自由記述法により回答を求めた。表1は恋愛対象の理想像についての回答を集計し、上位5項目について男女別にまとめたものである。また、表2は結婚対象の理想像についての回答を集計し、同様にまとめたものである。

これらの結果より、恋愛対象についても、結婚対象についても、男女間において一致あるいは類似した回答が多いことがわかる。

表1 恋愛対象の理想像

男子学生			女子学生		
順位	項目	回答率	順位	項目	回答率
1	優しい	9.6	1	優しい	13.4
2	容姿が良い(美人)	8.4	2	面白い	8.3
3	楽しい	3.5	3	容姿が良い(カッコいい)	6.2
4	明るい	3.3	4	頼れる	5.7
5	気が合う	2.9	5	気が合う	4.4

表2 結婚対象の理想像

順位	男子学生 項目	回答率	順位	女子学生 項目	回答率
1	家庭的	6.2	1	優しい	9.7
2	優しい	5.5	2	経済力がある	6.1
3	価値観が同じ	4.6		価値観が同じ	6.1
4	思いやりがある	2.2	4	家庭的	3.3
	明るい	2.2	5	安心できる	2.9

さらに詳しく見てみると、恋愛対象については、男女ともに「優しい」が最も多い回答であった。また、上位5項目のうち、4項目が性格や情緒などの内面的要素であるが、その中で外面的要素である「容姿」が男子学生で2位、女子学生が3位に挙げられている点が注目される。これは結婚対象の回答では、上位項目には見られなかった。このことから、現代の大学生は、恋愛では、その対象選択において外面的要素を考慮しているが、結婚では重視する要素ではないと考えていることが示唆される。

結婚対象についても、恋愛対象の回答と同様に、「優しい」が上位に挙げられていた。しかし、それ以外の項目は恋愛対象とは異なっており、「家庭的」や「価値観の一致」が上位に挙げられている。これらは、結婚に対する現実的な生活を見据えた考え方であると思われる。

また、恋愛であげられた回答が即時的・快楽的な内容が多いのに対し、結婚では持続的・現実的な内容であると考えられる。これは、古川ら（1994）による調査結果と一致している。このような目的意識の違いから、若い大学生においては恋愛と結婚とでは、異なった理想像が描かれていることが示唆された。

さらに、女子学生のみ、「経済力がある」や「頼れる」といった回答が見られた。これらは男子学生には見られなかったことから、調査対象となった女子学生には、現代における女性の独立志向とは異なって、男性に対する依存的傾向がまだ多分に残っていることが示唆された。

《現代に見られる恋愛のスタイルについて》

この調査は、現代に見られる恋愛のスタイルに関する質問12項目について、若い大学生に自分の考え方に当てはまるか否かを、6段階評定により回答することを求めるものであった。まず、被調査者の評定結果について、男女別に平均値を算出した（図1）。さらに、各調査項目ごとに男女間の意識差を調べるため、t検定を行ったが、いずれも有意差はなかった。このことから、現代に見られる恋愛のスタイルに対する考え方は、大学生の場合、男女共に類似していることが明らかにされた。

これらのうち、特徴的な項目について考察する。男女共に高い支持が見られた項目は、質問④「年齢差にこだわらない恋愛関係があってもよい」、質問⑤「大学生と中学生・高校生との恋愛的な交際があってもよい」であった。これらの質問の背景には、いわゆる「ロリータ・コンプレックス」や「ブラザー・コンプレックス」などを想定している。すなわち、年齢差の大きい恋愛関係を受け入れることができるかという質問であった。その結果、恋愛関係において、双方の年齢

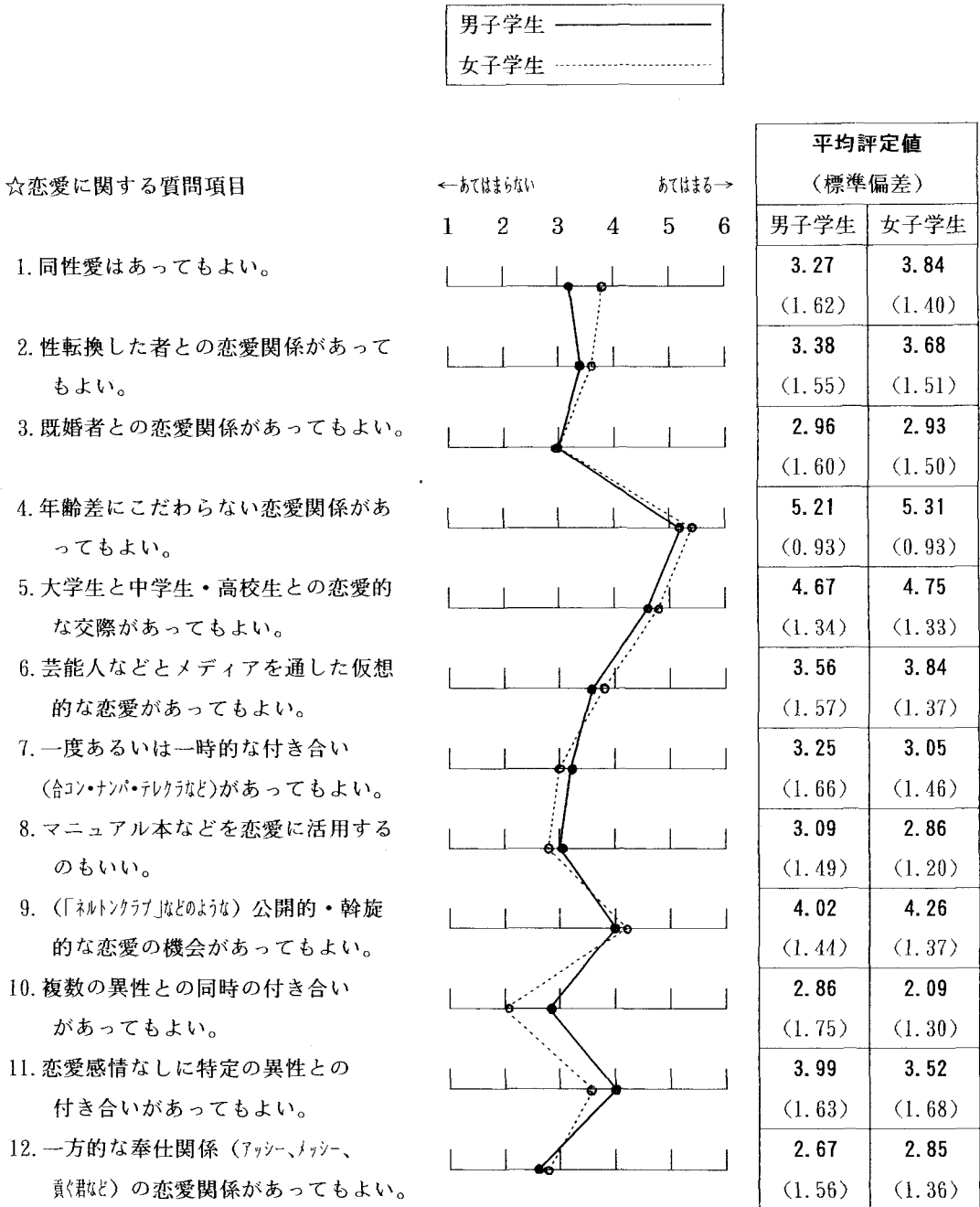


図1 現代的な恋愛のスタイルの受けとめ方

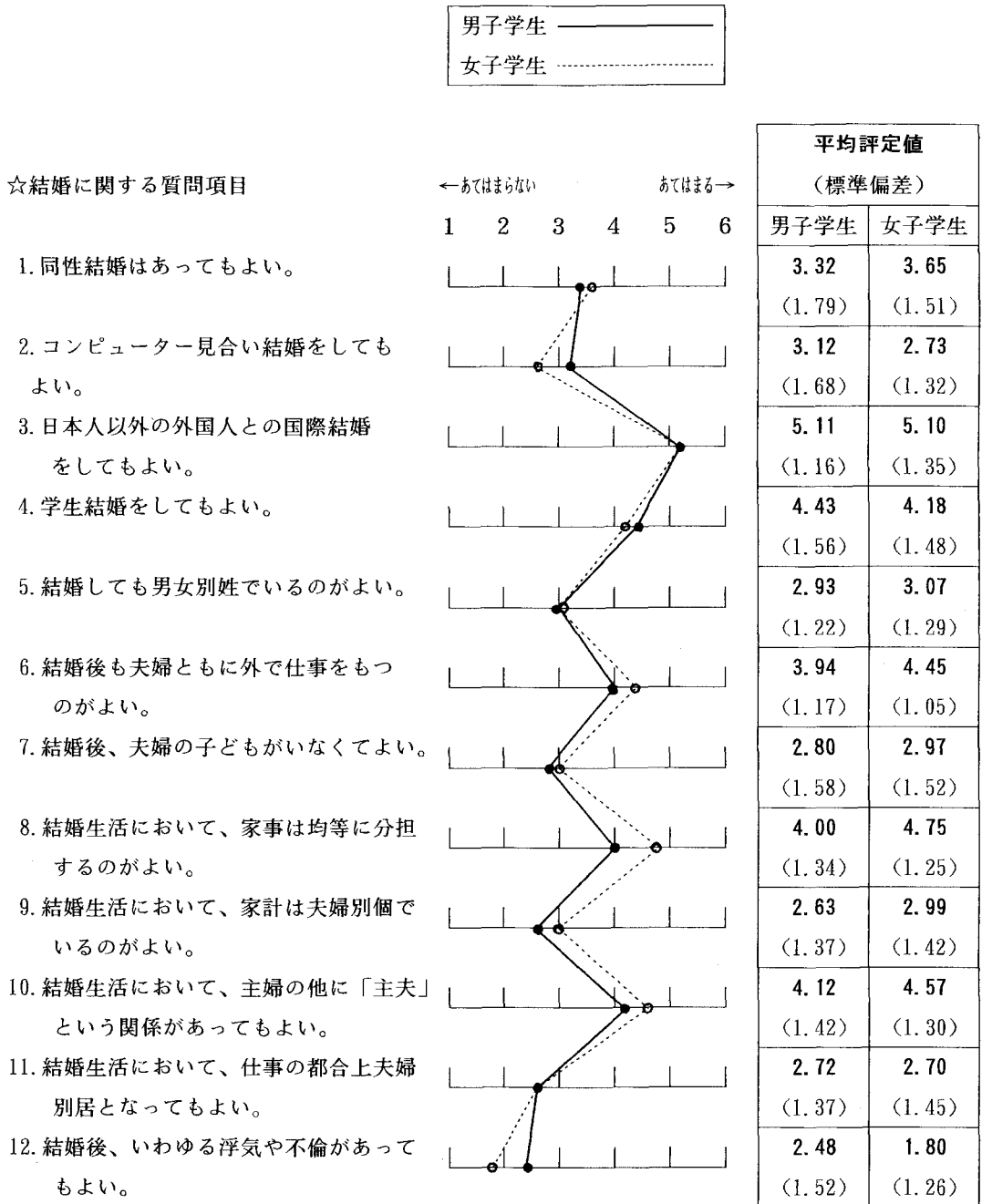


図2 現代的な結婚のスタイルの受けとめ方

差はあまり意識せずに受け入れることができると考えている者が多いことが明らかにされた。

また、逆に支持が低かったのは、質問⑩「複数の異性との同時の付き合いがあってもよい」、質問⑫「一方的な奉仕関係（いわゆる「アッシー」・「メッシー」・「貢ぐ君」など）の恋愛関係があってもよい」であった。質問⑩は、最近の恋愛のスタイルとして若者向けの雑誌などによく著されている「本命」「キープ」・・・といった恋愛対象を、順位づけして複数もつことに対する考え方を問うものであった。質問⑫については、これも最近の恋愛に見られる現象としてよく聞かれるもので、恋愛対象を特定化せず、場面に応じて変え、かつ相手を道具的・合理的に利用するという関係についての考え方を問うものであった。その結果、このような関係については、否定的に捉えていることが見出された。

《現代に見られる結婚のスタイルについて》

この調査は、現代に見られる結婚のスタイルに関する質問12項目について、自分の考え方に当てはまるか否かを、6段階評定により回答することを求めるものであった。まず、被調査者の評定結果について、男女別に平均値を算出した（図2）。さらに、各調査項目について男女間の意識差を調べるため、項目毎にも検定を行ったが、いずれも有意差はなかった。このことから、現代に見られる結婚のスタイルに対する考え方は、恋愛のスタイルと同様に男女共に類似したものであることが明らかにされた。しかしながら、結婚後の生活に関する質問（質問⑥～質問⑩）については、評定値のうえでは、女子学生の方が男子学生よりも全て高く支持している点特徴的であると思われる。これには、雇用問題などに見られる男女平等意識が、女性において特に高まってきたことの影響があると考えられる。

次に、項目別に特徴の見られたものについて考察する。まず、男女共に最も高い支持を得たのが、質問③「日本人以外の外国人との国際結婚をしてもよい」である。この結果は、大学生には国際化社会への意識がかなり浸透しているということの表れであると思われる。その他、高い支持が得られた項目は、質問④「学生結婚をしてもよい」、質問⑥「結婚後も夫婦ともに外で仕事を持つのがよい」、質問⑧「結婚生活において、家事は均等に分担するのがよい」、質問⑩「結婚生活において、主婦のほかに「主夫」という関係があってもよい」である。質問④については、一般的には現実性が低いものと考えられがちな内容であるが、大学生活に対するゆとりの表れであろうか、大学生は学生結婚を可能なものとして捉えていることが示唆される。質問⑥、質問⑧、質問⑩については、結婚後の生活における家事や仕事等についての男女平等意識について問うものであった。これらの結果は、問題で述べた近藤（1993）の見解と一致するものであった。このことから、大学生は、男女ともに結婚生活において、家事や仕事は夫婦ともに平等に行うべきであると考えていることが明らかにされた。

反対に、支持が低かったのは、質問②「コンピューター見合い結婚をしてもよい」、質問⑤「結婚しても男女別姓でいるのがよい」、質問⑨「結婚生活において家計は夫婦別個であるのがよい」、質問⑪「結婚生活において、仕事の都合上夫婦別居となってもよい」、質問⑫「結婚後、いわゆる浮気や不倫があってもよい」などであった。まず、質問②で挙げられたコンピューター見合いは、最近新聞やテレビのニュースなどで多く取り上げられており、主として企業や官庁で働く若い社会人に多く活用されているといわれる。これに対して、比較的時間にゆとりがあると思われる大学生は、あまり活用したくないと考えていることが明らかにされた。また、質問⑤、質問⑨、質問⑪については、結婚後の生活における「夫婦の独立・別離」という点が共通している。

これらの点から、大学生は結婚生活において男女が平等であっても、夫婦が個々に独立するのではなく、共生していくという考え方が支持されているということが示唆された。質問⑩については、従来より浮気・不倫は、一般的に否定されてきたものであるが、現代の大学生にも、やはり否定的に捉えられていることが明らかにされた。

《全体的考察》

以上の結果を全体的に見ると、恋愛についても、結婚についても、男女間で回答にほとんど差がない、と結論づけられるであろう。これは、最近の若い大学生は、恋愛や結婚に関しては、男女共に共通した価値観をもっていることを示唆している。

また、恋愛や結婚の現代的なスタイルに対する意識は、項目により異なるが、いずれも極端に否定的でも肯定的でもなく、平均的な回答であると言える。しかし、複数の対象との交際や、夫婦の独立・別離など、従来は社会的に否定されてきたことがらについては、まだ否定的に捉えていることが明らかになった。

最後に、本研究の問題点として、被調査者が教育大学学生に限定されたことが挙げられる。同じ世代層である、他学部学生や短期大学生、専門学校生、あるいは社会人に本調査を行うことにより集団の成員性を特徴づけるような結果が得られると予想される。今後さらに検討すべき課題である。

引用文献

- 古川智子他 1994 今どきの高校生の実態（東京都立東村山西高等学校）教育アンケート調査年鑑1994年度版, 375-392. 創育社
- 川畑佳子 1990 青年期女子における「結婚」像の変容について 京都大学教育学部紀要 XXXIV, 214-225.
- 経済企画庁 1992 国民生活白書 平成4年度版 大蔵省印刷局
- 近藤 裕 1993 夫のための結婚心理学 一妻の変化に気づかない夫たちへー 金子書房
- 松井 豊 1993 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 松井 豊 1993 恋ごろの科学 サイエンス社
- 和田 実 1994 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 34, 153-163.
- 杉村 健 1988 教育心理学 小林出版
- 総務庁統計局 1995 統計で見る日本 (財)日本統計協会

付 記

本論文に関するデータ集計に際し、本学心理学専攻2回生（代表 乾 信一郎君、松久 修君）のご協力を得ました。また、データ収集にあたっては豊田弘司先生及びその受講生の皆様のご協力を得ました。記して感謝の意を表します。